

タラスク再考

蔵持不三也

はじめに	2 タラスク祭
1 祝祭の位相	3 タラスク祭の象徴世界——まとめに代えて

論文要旨

本稿は、フランス南部プロヴァンス地方の小都市タラスコンで、いまなお営まれている「伝統的」祝祭《タラスク》(La Tarasque)の調査報告である。

この祭りについては、ルイ・デュモンたちが1946年に構造論的・技術論的方法を駆使して調査し、その成果は1951年に刊行された名著『ラ・タラスク』に結実している。だが、それから約半世紀、「フランス民俗学」を「フランス民族学」へと転位させたといわれるデュモンの後を受けてタラスク祭を調査し、モノグラフを作成した研究者はほとんどいない。

本稿の目的は、したがって祭りの由来譚たるタラスク／聖女マルタ伝承を、その歴史的背景や造形伝統から再検討し、と同時に、変貌著しい祭りの現在を過去の姿と比較しながら、この祭りに仮託された社会的意味や象徴性を構造的に分析するところにある。そして、こうした一連の作業は、必然的にデュモンの考察を批判的に補完することになるはずである。